

今号の
表紙作家

絵は外の世界を見る通り道



溝井悦子 (高14回)

●みぞい・えつこ

旧姓・羽生。飯田西中出身。青山学院女子短期大学英米文学科卒。東洋美術学校夜間部絵画科卒。ハマ展（横浜美術協会主催）をはじめ各種展覧会に出品後、2010年新制作展（新制作協会主催）で初入選。15年に神奈川県女流展（神奈川県女流美術家協会主催）で初入選した後、奨励賞1回、県知事賞2回受賞。高校時代は合唱班。

振り返れば、絵にまつわる思い出は多い。まず、飯田の動物園の写生会。小学校のころだったろうか。今はない「ハリステューインガム」が後援だった。記憶

は不確かだが、不思議なことにそんなことが浮かんできた。

今、身の回りを整理している。中学、高校、短大の頃の落書きが出てきた。中学の修学旅行、高校の部活の駒ヶ岳のキャンプのスケッチ、そして授業中の先生たちの顔のスケッチまでも。勉強は好きでなかったらしい。でも懐かしい。

高校を出て5月の連休早々に明治神宮で友達と再会。ベンチで話していると、「産経新聞のカットを描いている。そこに立ってください」と声をかけられた。後にその画家の美術学校に通うことになる。独立美術協会の清水銀徳先生との出会いだっただ。

就職したのは広告関係の会社。仕事を5時で早引きするのを許してもらって神田から高円寺の美術学校に通った。清水先生の絵はのびのびと自由な画風で、飯田から出てきたばかりの私にはとても新鮮だった。上野の独立美術展はよく観に行つたものだ。

子育てが終わり、やっぱり絵を描きたいと思うようになる。息子が大学の頃か

らバンドに夢中、彼らのライブを聴きに行くようになるうち「そうだ、私も好きなことをしよう」。若者たちに触発される。そして音楽のことを描きはじめた。

たった1回の個展は、夫の転勤地・沖縄で開いた。知人の紹介で親しくなつた絵の仲間とのつながりがきっかけだった。何回かのグループ展に続き、肩をたたいてもらったのが個展開催につながつた。沖縄の風物の絵数点、陶芸のシーサーまで並べた。50号の「喜屋武岬」も描いて展示した。沖縄は父が戦死した所。喜屋武岬の近くで亡くなつたらしい。この個展で沖縄との心の整理ができたような気がする。転勤はちやうど戦後60年の節目の時にあつていた。今、二男が沖縄に定住。時々訪れて、北から南まで楽しんでる。

絵は私が外の世界を見る通り道。いっぱい時間のある今、興味がわくまま思いつくまま、さぐりさぐり絵を描いている。音楽のテーマは難しい。おおよそアナログ世界にいる私、現代から取り残されそう。この世の中はどこへ行こうとしているのか。人間の世界は大昔も今も変わらないというのを信じたい。人の繋がりがこそ安らぎをもらえると。そして絵を描く力が衰えませぬようにと願う。